政治家であり科学者であった坦庵の情熱にふれる

江川邸

重要文化財

江川家は、28代江川英長が徳川家康に仕えて代官となってから明治に至るまで、「世襲代官」としてこの地を治めました。江川家代々の屋敷「江川邸」は、「江川家住宅」として国の重要文化財に指定されています。

江川邸／表門

主屋（552㎡）は高さ12m 余の大屋根を支える豪壮な架構で有名。主屋の原型となる建物は、関ヶ原の合戦のあった慶長5年（1600）前後に建てられたと推定されています。部材の中には室町時代まで遡るものがあり、江川氏が古くからこの地に住んできたことをうかがわせます。

種痘

坦庵は種痘（天然痘の予防接種）の必要性を訴えました。しかし、当時の人々は種痘についての知識もなく、接種を恐れました。そこで坦庵は、まず自分の子供たちに種痘を行い、人々を安心させた後の嘉永３年（1850）に「西洋種痘法の告諭」を発し、管轄地域全域で種痘を行いました。坦庵の強い決断が天然痘から民衆を救ったのです。この成功は、幕府にも認められ伊東玄朴（いとうげんぼく）や大槻俊斎（おおつきしゅんさい）らが中心となって江戸に種痘所が設置されました。この施設は明治政府にも引き継がれ、後の東京大学医学部の前身となっています。

高島秋帆（たかしましゅうはん）から免許皆伝を受け、佐久間象山（さくましょうざん）らも師事した江川坦庵

本気で日本の未来を考えた場所

「韮山塾」

坦庵は代官としての職務を全うする傍ら、蘭書を読み解き、海防政策の研究にも力を注いでいました。アヘン戦争で大国「清」がイギリスに敗れるなど対外危機が高まる中、幾度となく海防の重要性や西洋式砲術の導入を幕府に進言しています。また、自ら西洋式砲術を学ぶため、先駆者であった高島秋帆に師事し、免許皆伝を受けるまでに至ります。

さらに、その知識や技術を広く普及するために、坦庵は江川邸内に「韮山塾」を開講。全国から集まった入門者の中には、佐久間象山のような幕末を代表する知識人もいました。また、坦庵の死後は、江戸の芝新銭座（しばしんせんざ）大小砲習練場（だいしょうほうじょうれんじょう）に「縄武館」と呼ばれる塾が設けられ、韮山塾出身の坦庵の高弟が、維新から明治時代にかけて活躍した黒田清隆、大山巌らに教授しています。

坦庵の知識・技術はこうして受け継がれ、韮山塾の門をくぐった多くの門人たちが、明治日本の近代化に寄与しました。動乱の幕末期、日本の未来を見つめ、本気で日本の未来を考えた場所「韮山塾」が、ここ江川邸にあります。

パン祖

坦庵は兵糧や備蓄食料として西洋のパンに着目。日本で初めてパンを焼いた人物とされています。この功績を称え全国パン協議会から「パン祖」の称号が贈られています。

パン祖記念碑

伊豆の国市を中心に広がっていた『幻の県』

韮山県の広さ

江戸時代末期、韮山代官だった江川家の管轄地は、伊豆だけにとどまらず駿河、相模、甲斐、武蔵にまでわたっていました。その管轄地は明治になっても継承され、伊豆韮山（江川邸）を県庁とし、現在の神奈川県や山梨県、東京都の一部を韮山県として管轄。明治4年、神奈川西部と伊豆からなる足柄県が設置された後も、江川邸は支庁として使われました。